
【うた腐り】カクテル【レントキ】

たかむら伊織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【うた腐り】カクテル 【レントキ】

【Nコード】

N1490Z

【作者名】

たかむら伊織

【あらすじ】

pixivと同時投稿です。

(前書き)

もうすぐ、うたプリオンリーイベントですねー。自分は読者参加しますw 見かけたら声かけてください(分かるかい！)

サークル参加はやはりスパコミになりそうです。なんとか構想がまとまってちまちま書き始めてるんですが、なんせ久しぶりすぎてどうしたらいいか分からないよ、ママン(・ω・、)

実は、パラレル設定大好きなので、新刊が間に合えば、パラレル2冊出ているはず！！ 有言実行頑張ります！↑

そういえば、R18作品より悲恋作品の方が反応大きくてびっくりしていますw w 皆様、悲恋レントキ好物でいらっしやるのかしら。。。本当は二人には幸せになっていたきたいのですがね。たまーに書きたくなりますね。うん。

たまたま見かけたショットバーに、レンは足を踏み入れた。

適度に照明が落とされ、大きな声で騒ぐような客もいない。

インテリアも過度に凝ってはいないが、いい物を使っているのが分かる。

さり気なく観察していると隅のほうで目立たないようにしているバーテンダーがレンの目に止まった。

制服がよく似合う：いや、自分に似合う着こなし方を知っているのか。

淋しげと言ってもいい瞳が印象的だった。

レンはそつとカウンター席についた。

「いらっしゃいませ」

その心地よいトーンに、レンは心の中で笑顔を見せる。

「何にいたしましたようか」

ナッツ類の入った小皿を出しながら、バーテンダーは首を傾げた。

「そうだなあ。俺のイメージでおまかせで」

「かしこまりました」

じっと見つめるレンの視線をごまかすように、ずらっと並ぶ酒の瓶に視線を移す。

いちいち：かわいいよね…。

まさか目の前の男がそんなことを考えているとは思いもしない彼は、慣れた手つきでシェイカーをふると、ショートグラスに注いだ。

すっと目の前に押し出されたグラスを見て、レンはちよつと首を傾げた。

「オレンジ色：ね。俺、そんなに甘く見えるかな？」

「さあ、どうでしょうか…」

シェイカー類を片付けながら、彼ははぐらかすように答える。

レンはちよつとグラスに口をつけて。

そして、くつと笑った。

それは、見た目と違って、キリツと辛口な：大人の味だった。

「この名前は？」

「お客様の名前と同じです」

「そう。俺は神宮寺レン」

目で催促されて、彼はレンに向き直った。

「私は…一ノ瀬トキヤです」

「ふーん、気に入っちゃった」

「ありがとうございます」

あくまで丁寧に頭を下げるトキヤの姿に、レンは笑顔を絶やさない。

レンの「気に入っちゃった」の真の意味をトキヤが知るのはもう少し先のこととなる…。

それ以来、レンは2、3日に一度のペースでトキヤの店に通うようになった。

オーダーはいつも

「今日の俺のイメージでおまかせで」

で決まっていた。

その日もレンはカウンター越しにトキヤの前に座っている。

ずっと目の前に滑らされたのは、バーボンのロックだった。

ロックグラスを弾いて、その音を楽しむような表情を見せて、レンはトキヤに向き直った。

「珍しいね。今日の俺はこのイメージ？」

「そうですね。今日は何かあったのですか？」

「んー、まあ、ちょっといろいろとね…」

氷を指で軽く回しながら憂いを含んだ表情を見せるレンを、トキヤは純粹に綺麗だと思った。

いつもカウンターのこちらと向こうで、飲み物を通してではあるけれど、二人はいろんな話をしてきた。

だからこそ、今日のレンはちょっといつもと違う。

そうトキヤは思う。

だけど、何があったのか無理に話させるようなことはしたくなかった。

何気ない様子でグラスを磨くトキヤを、レンはじっと見つめる。

「イッチー…」

その呼びかけで、トキヤは手を止めた。何うようにレンに視線を向ける。

「それは…私のことですか？」

「他にイッチーって人がいれば違うけどね。こう呼ばれるのはイヤ

「？」

「…なんとも言えせんね」

少し困ったような複雑な表情をしたトキヤに、レンはふっと笑ってグラスをあおって空にしてしまう。

トキヤは黙って空になってしまったグラスを下げて、新しいグラスをそっと滑らせる。

今日は本当にいつもと違う。いつもはこんなペースでグラスを空にすることは無い。

「イッチー、俺、失恋しちゃった…」

新しいグラスに目を落としながら、レンは小さくつぶやいた。

「そう…ですか。あなたを袖にする女性がいるとは思えないのですが」

「それはそうさ。レディ達はいつでも俺に夢中だからね」

「そうですか」

冗談を言われたのかとさりとかわしたトキヤだったが、レンはそれでもグラスから視線を外そうとしない。

「普通じゃない相手なんだ。手強いよ…」

「そうなんですか」

「幼馴染みって言えばいいのかな…。小さい頃はよく一緒に遊んだりしたんだけどね」

「大人になってからは…やはり変わりますか」

「…変わったのは…多分、俺の方なんだ。向こうは変わってない。悲しいくらいに変わってない」

そう言って、更にグラスを空にする。

そんなレンの姿を見て、トキヤは少し甘みのあるカクテルを差し出した。

黙って口をつけたレンは少し寂し気な表情を見せた。

「イッチーは分かってるね」

「お相手もあなたのことをよく分かってらしたんではないですか」

「…そうかもしれないね。多分…だからダメだったんだと思う」

「そうじゃないんじゃないですか」

静かに言ったトキヤを見るレンの瞳が少しアルコールで潤んで見える。

この量で酔ってしまえるなら…多分楽なのだろうが、アルコールに強い体質がそれを邪魔しているようだった。

「どういう意味かな？」

「私が言わなくてもご自分でお分かりなんじゃないですか？」

「分からないね。イチーの意見を聞かせてもらおうか」

少しためらっている様子のトキヤを、レンは目で促す。

「…あなたは相手のことが大切だった。本当に大切に思っていた。だから…自ら身を引いた。違いますか？」

「…ふーん？」

正直に言う。レンはひどく驚いていた。なぜなら、トキヤの言うことは全て本当のことだったから。

見てたんじゃないだろうな…。

そんな有り得ないことまで考えてしまう。

「イチーは…人の心が読めるの？」

「そんなことはありません。ただ…分かるんです。私にも経験がありますから」

「へえ…興味深いね。その話聞かせてよ」

「…相手が私には純粹すぎて…純粹なだけではなくて、いろいろと心の中に抱えていると分かったの。私が関わりと汚してしまいそうで逃げてしまったんです。それだけの話です」

「ふーん…。そういうこともあるよね。ちなみにさ、イッチーはおまかせでって言われてさ、困ることは無いの？」

「…ごくたまにあります。ただ、相性の合う方であれば、自然にイメージがわいてきます。自分でもどういふことかよく分からないんですが…」

「なるほどね…」

何度か小さく頷くと、レンはショートグラスを一気に空けて。

「ごちそうさま」

そう言うのと、右手を上げて危なげない歩調で店を出ていった。

そんなレンの後ろ姿を見送りながら。

「…うらやましい方ですね」

そうつぶやく。

レンのことがうらやましいのか。それともレンの相手がうらやましいのか。

それはトキヤにしか分からないことだった…。

それから数週間、レンは姿を見せなかった。

連絡先を知っているわけでは無い。知っていたとしてもこちらから来てくさいと言うのも変な話だ。

だけど、カウンターの向こうにレンの姿が無いのは…思っていたよりも…なんというか寂しいものだった。

そして…トキヤはだんだんと目の前にいる客がどんなことを考えているか、どんなものが好みなのか分からなくなってきたいる自分に気づいた。

いつもはずっと自分の中にイメージが入ってくるのに、それが何かにはじかれるように去っていつてしまうのだ。

これは…もしかして…。いや、そんなはずは無い。

トキヤは心の中に浮かぶ思いを必死で打ち消した。

こういう時は仕事をしていてもなかなか時間が過ぎてくれないものだ。

帰りたい。帰りたい。

そう思いながらもなんとか閉店までカウンターの途中で立ち続けたトキヤは時間になると同時に店を飛び出した。

それでも家に一人で帰る気にはなれず。だからと言ってどこかへ行くあてもなく。

ぼんやりとまだ暗い空を見上げたところに、肩を叩かれて思わず身

を固くする。

「…そんなに驚かなくてもいいんじゃないの、イッチー」

それは…この数週間、待っていた人の姿。

「…すみません。今日はもう閉店で…」

「分かってるよ。こんなに遅くまでやってるんだね」

軽く肩をすくめるレンに、トキヤは驚きを隠すことができなかった。

「…もしかして、ずっとここで待ってましたんですか？」

「ずっとってわけじゃないけどね」

「…どうして店に入らなかったんです？」

「さあ、どうしてだろう。イッチーと店の外で会ってみたかったのかもしれない」

「神宮寺さん…」

「あ、それは止めて。レンでいいから。今は客じゃないからいいだろう？」

そういう問題ではありません…と思いつながらも、意を決したように、トキヤは口を開いた。

「…レン」

「ん？」

「私は…」

「私は？」

聞き返されて…先を続けようとしたのに。こみ上げてくる想いにトキヤは言葉を失う。

そして。自分でも訳が分からないまま、涙が溢れて止まらなくなる。

「イッチー？」

さすがに驚いたような様子を見せたが、すぐに肩に手を回して周囲から見えないようにかばいながら、レンはタクシーを止める。

頭が混乱したままのトキヤが我に返ったのは、瀟洒なマンションの前でタクシーから降りた頃だった。

「あの…ここは…」

「ん？ 俺の家」

咄然としたままのトキヤはエレベーターで最上階まで上がっていくレンに黙ってついていくことになった。

「どうぞ。入って」

ここで、さすがにトキヤは我に返った。

「いえ、あの…私は…」

「ここまで来て遠慮したって仕方無いでしょ。いいから入って」

「…すみません」

「謝ることないって。連れて来たのは俺だしね。さあ」

重ねて言われて、トキヤは恐る恐る中に入って、今後は違う意味で呆然とする。

部屋のドアを開けた向こうに広がっていたのは、信じられないくらい広いリビング。

見るからに高価そうな家具。

そしてなにより、トキヤの目を奪ったのは、そのまま営業ができるんじゃないか…というくらい充実しているバーカウンターだった。

「これは…」

「あ、やっぱり気になる？　ちょっとこれは俺の自慢なんだけど。ちょうどいいや。仕事終わったばかりで申し訳ないけど、何か作ってよ、二人分」

「二人分…ですか？」

「そう、イッチーと俺の分」

「…分かりました」

トキヤは…レンと初めて会った日のことを思い出した。そして黙ってシェイカーを振った。

「できました」

言ってトキヤが差し出したのは、レンが初めて店を訪れた時と同じオレンジ色のカクテルだった。

笑顔を見せて、受け取ったグラスを目の高さまで上げた。

「乾杯」

「…乾杯」

口をつけたレンは更に、深い笑顔を見せた。

初めて会った時のものより、少し甘みがあって。けれど、すっきりとした後味。

「この名前は？」

「レン…です」

「イッチー最高！」

楽しげに言うと、レンは軽くグラスを空にした。

そして、口をつけただけのトキヤのグラスを手に取り口に含むと、

そのままトキヤを強引に引き寄せてくちづける。

思わず身体を固くするトキヤに構わず、レンは口移しで強引に飲ませてしまう。

そして、その甘さを楽しむように、深く口づけ、少し溢れてしまったしずくを舐めとる。

それだけで腰がくだけそうになるトキヤとともに、レンは床に倒れ込んだ。

「イッチー…一緒にいよう」

「…何を急に……」

「イッチーなら分かるでしょ？　きっと俺たちは一緒に過ごすために出会ったんだ。前の恋は…このための試練だったんだよ。ここで俺のためにシェイカーを振ってよ」

「…そんな告白聞いたことはありません」

「いいじゃない、初めてってのは新鮮なもんだよ」

「そういう問題じゃありません。それに…私は仕事を辞める気はありませんよ」

「それなら俺が毎日通うから問題ないよ」

「あなたという人は…!」

呆れ返った様子のトキヤに、もう一度軽くキスをしてレンは笑顔を見せた。

トキヤがいつの間にか惹かれてしまったその笑顔。

「降参しちやいなよ、イッチー」

そうなのだ。もう、トキヤは降参しているのだ。レンに惹かれる自分をはっきりと自覚しているのだ。

「∴それではひとつ条件があります」

「伺いましょう」

「イッチーというのは止めてください。私の名前は一ノ瀬トキヤです」

「イッチーも可愛いと思うけどね。でも、トキヤという名前もステキだな。分かった、その条件飲むよ」

「ありがとうございます、レン∴」

なぜ、ここで感謝の言葉が出てくるのか∴トキヤ自身にもよく分からなかったけれど。

今の自分の気持ちを表すのに一番ふさわしい気がした。

「こちらこそありがとう、トキヤ」

そして、レンにもその気持ちが伝わったのか、自然にその言葉が出

てきた。

強くトキヤを抱きしめて。レンは絶対に離さないと心の中に誓う。

自分を抱きしめるレンのぬくもりを感じながら。これでよかったんだとトキヤは心の中でつぶやく。

大切な…自分にとって大切な存在が近くにあることを幸せに思っている。

二人は長い間、お互いを抱きしめていたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1490z/>

【うた腐り】カクテル【レントキ】

2011年12月5日09時00分発行